研　究　業　績

へき地学童の耳鼻咽喉科検診成績

（第 4 報）

富山県農村医学研究会、金沢大学　豊　田　文　一
農協高岡病院耳鼻咽喉科　村　田　志　朗
金沢大学医療技術短期大学部　津　田　光　世
山　田　民　子

はじめに

私どもは昭和45年以来へき地学童の耳鼻咽喉科検診を実施してきた。逐年的には、最近の過疎現象の影響により、へき地学童数の激減がみられる所もあり、他面交通網の整備とともに、医療面においても各種疾患の様相も変ぼうをきたしていることも想像される。この間にあり私どもの取扱う上気道の疾患、とくに慢性炎症は直接生命に関与すること少なく、従来より患者自身等閑に附せられていた。ことに学童においてはその感を深しく、各種疾患の頻度もへき地では高率に認められると多数の文献に記載してある。私どものこの調査は昭和45年[1]、46年[2]、47年[3]とすでに3回にわたり、主として富山県中新川郡上市町地区を中心として実施してきたが、昭和48年も同地区において行ない、ここにその成績を報告し、2、3の所感を述べてみたい。

調査成績

本調査は昭和48年5月に行なったもので、検査人員 1,387名で、対照小学校は農山村として柿沢小学校、山村として大岩小学校、白萩東部小学校、白萩西部小学校、白萩南部小学校である。各学童数は第1表に示す。

調査成績をまとめると、柿沢小学校（第2表）、大岩小学校（第3表）、白萩東部小学校（第4表）、白萩西部小学校（第5表）、白萩南部小学校（第6表）、上市中央小学校（第7表）の如くなる。

第1表　学校別、学年別、学童数

学校名＼学年	1年	2	3	4	5	6	計	%
上市中央小学校	179人	169	188	177	198	159	1,070	77.2
柿沢小学校	22	23	16	20	21	19	121	8.7
大岩小学校	11	4	7	12	7	5	46	3.3
白萩東部小学校	2	3	6	5	7	6	29	2.1
白萩西部小学校	13	9	9	16	18	10	75	5.4
白萩南部小学校	4	9	8	9	8	8	46	3.3
							1,387	

上市地区小学校における耳鼻咽喉科疾患

学校別＼疾患名		耳垢	中耳炎	難聴	鼻炎	鼻たけ	鼻中隔弯曲症	慢性副鼻腔炎	扁桃肥大	扁桃炎	アデノイド	鼻アレルギー	咽頭炎	その他	罹患者数	人数
上市中央小学校	人			80	58		1	38	79	71	9	7	10	8	361	1,070
	%			7.5	5.4		0.1	3.6	7.4	6.6	0.8	0.7	0.9	0.7	33.7	
その他の小学校	人			39	36		2	22	19	25	12			2	157	317
	%			12.3	11.4		0.6	6.9	6.0	7.9	3.8			0.6	49.5	

その他の疾患
耳混濁
唇裂
口蓋裂
鼻出血
アンギーナ

第2表　柿　沢　小　学　校

疾患名／学年	耳垢	中耳炎	難聴	鼻炎	鼻たけ	鼻中隔弯曲症	慢性副鼻腔炎	扁桃肥大	扁桃炎	アデノイド	鼻アレルギー	咽頭炎	その他	罹患者数	人数
1			3	2			1	2	1	1				10	22
2			2	4			3	1	3					13	23
3			1	4				1						6	16
4			5	1			3	2						11	20
5			3	1			2	1	1				2	10	21
6			2	1			3	1	5					12	19
計			16	13			12	8	10	1			2	62	121
%			13.2	10.7			9.9	6.6	8.3	0.8			1.7	51.2	

第3表　大　岩　小　学　校

疾患名／学年	耳垢	中耳炎	難聴	鼻炎	鼻たけ	鼻中隔弯曲症	慢性副鼻腔炎	扁桃肥大	扁桃炎	アデノイド	鼻アレルギー	咽頭炎	その他	罹患者数	人数
1			2	2			2	1		2				9	11
2			1	2		1								4	4
3								1	1					2	7
4			1	3		1			2					7	12
5			1					1	1					3	7
6								1						1	5
計			5	7		2	2	4	4	2				26	46
%			10.9	15.3		4.3	4.3	8.7	8.7	4.3				56.5	

第4表　白萩東部小学校

疾患名／学年	耳垢	中耳炎	難聴	鼻炎	鼻たけ	鼻中隔弯曲症	慢性副鼻腔炎	扁桃肥大	扁桃炎	アデノイド	鼻アレルギー	咽頭炎	その他	罹患者数	人数
1			1	1										2	2
2							1							1	3
3							2			1				3	6
4														0	5
5				1					1					2	7
6							1							1	6
計			1	2			4		1	1				9	29
%			3.4	7.0			13.8		3.4	3.4				31.0	

第5表　白萩西部小学校

疾患名／学年	耳垢	中耳炎	難聴	鼻炎	鼻たけ	鼻中隔弯曲症	慢性副鼻腔炎	扁桃肥大	扁桃炎	アデノイド	鼻アレルギー	咽頭炎	その他	罹患者数	人数
1				1					1	2				4	13
2			1	4				1	2	2				10	9
3				2						1				3	9
4			2	1			1	1	1	1				7	16
5			1	1			2	2	4	1				11	18
6				2			1	2						5	10
計			4	11			4	6	8	7				40	75
%			5.3	14.7			5.3	8.0	10.7	9.3				53.3	

第6表　白萩南部小学校

疾患名／学年	耳垢	中耳炎	難聴	鼻炎	鼻たけ	鼻中隔弯曲症	慢性副鼻腔炎	扁桃肥大	扁桃炎	アデノイド	鼻アレルギー	咽頭炎	その他	罹患者数	人数
1			1	1					1	1				4	4
2			3					1						4	9
3			3						1					4	8
4			1											1	9
5			2	1										3	8
6			3	1										4	8
計			13	3				1	2	1				20	46
%			28.4	6.6				2.1	4.2	2.1				43.4	

第7表　上市中央小学校

疾患名／学年	耳垢	中耳炎	難聴	鼻炎	鼻たけ	鼻中隔弯曲症	慢性副鼻腔炎	扁桃肥大	扁桃炎	アデノイド	鼻アレルギー	咽頭炎	その他	罹患者数	人数
1			24	21			10	20	18	3	4	4	3	107	179
2			19	12			10	19	11	5	1	4	1	82	169
3			10	12			7	10	18	1			2	60	188
4			7	6			4	11	10		1	1	2	42	177
5			14	6			3	11	12		1			47	198
6			6	1		1	4	8	2			1		23	159
計			80	58		1	38	79	71	9	7	10	8	361	1,070
%			7.5	5.4		0.1	3.6	7.4	6.6	0.8	0.7	0.9	0.7	33.7	

総　　括

上気道疾患は幼少期より学童期にわたり多発の傾向にあり、学校保健の上からも以前より重視され、とくに学校保健法で中耳炎、蓄膿症（慢性副鼻腔炎に限る）及びアデノイドは学校病として政令により指定されている。

しかし昭和33年に指定されたものであり、最近の疾病構造の変遷より、これに対して疑義もあり、改訂の必要に迫られていると考える。それは私どもが最近10年間、学校検診に際して感ずることは、中耳炎は絶無に近い。最も関心を呼び起すものは難聴であり、この問題

は学校病として最重点に指定さるべきものである。かつて北陸地方において、私どもがへき地学童1,431名についての調査で、112名（7.8%）の難聴学童を見出した。障害部位では感音難聴58.0%、伝音難聴14.3%、混合難聴27.7%であった。このように分別検討の上での対策が必要である。今回の調査で難聴の検査を行なったが、調査期間が短かく、かつ検査場所が学校内であったため、118名という多数の難聴学童を見出したが、その比率8.5%という高いものであった。これは正常聴力耳の平均損失値とスクリーニングレベルについて梅田らの方法に準拠したが、上市地区での基礎調査でスクリーニングレベルについて設定しなかったのはかなり疑問点もあり、一応成績として記載したものの、この点について再検討を要し、本年度は精検を行う予定である。

さて上気道の炎症は下気道に波及し、各種疾患につながり、また限局していても頭部の神経障害を起すことは明かであり、学童疾患として鼻副鼻腔の慢性炎症は重視すべきものの一つである。先ず慢性鼻炎の逐年的推移をみると、昭和45年10.5%、46年7.0、47年6.0%、48年6.8%とほぼ7%前後とみられる。慢性副鼻腔炎は昭和45年5.2%、46年4.7%、47年2.5%、48年5.0%で、47年は比率の低下をみたが、48年は上昇している。最近学童における慢性副鼻腔炎の比率は低下しているが、市街地、平坦地、農村を含む中央小学校では本年度3.6%に対し、山村である他の地区小学校ではなお10.1%の高い比率である。この事実は第3報でも詳述してあるが、地域環境の相違が、これらの比率に重大な影響を及ぼしているものと思われる。

次に慢性扁桃炎と扁桃肥大であるが、以前は学童期疾病として過大評価されていたきらいもあり、学校検診の重点におかれていた。しかし基礎的研究が進むにつれて、その機能とくに免疫学的見解が明らかにされ、診断基準も大幅の変革をみ、従って専門医による大衆への啓蒙は、このことに対する認識を新たにした。ただ扁桃は場合により病巣感染に重大な意義を有するので、慎重を期し、私どもは検診に当たり、それぞれの保護者の注意を喚起し、指示を与えている。一方治療面では、市街地区域を除き、へき地ではなおざりにされがちで、満足な事故処理は期待されがたく、具体的にみて手術ずみのもの18名、他地域では2名にすぎず、このことは上述の事実を物語るものである。アデノイドは学校病に指定してあるが、もちろんこれにより上気道の慢性炎症の根源ともなりうるし、また耳管狭窄を起して難聴の原因ともなりうるので注意せねばならない。扁桃肥大、扁桃炎の比率は市街地、平坦地、農村、山村と大した相違はなかったが、アデノイドは一般に山村の方が高い比率を示した。このことは慢性鼻副鼻腔炎の頻度に平行している。しかしこの診断は検診時においては、診断はむつかしく、咽頭扁桃の肥大により、何らかの障害のあるもののみを選択したものである。ために今までの文献に現われた統計資料に比較して低率である。

最後に今回における罹患率について触れるが、中央小学校では、33.7%、その他の小学校では49.5%で格段の相違があり、専門医の常任する市街地区域と遠隔のへき地との地域環境の相違を如実に物語るものである。

結　　論

私どもは昭和48年、引き続いてへき地学童の耳鼻咽喉科検診を行った。

その結果次のような結論をえた。

(1) 被検人員1,387名で、へき地学童の激少が目立った。

(2) スクリーニングテストで難聴は12.0%にみられたが、これは前年に比較して著しく高率で、この点に関し再検討の必要を認めた。

(3) 鼻炎、慢性副鼻腔炎の比率は前回と大差なく、ただ特記すべきはへき地小学校では

市街地に比較してかなりの高率を示した。

(4) 扁桃肥大、慢性扁桃炎は、例年に比してやや高率であり、各地区間に大差はなく、アデノイドは減少の傾向にあり、ただ山村部小学校では高率であった。

(5) 今回の検診において、罹患率は市街地小学校では33.7%、山村地区小学校では49.5%と、後者では著しく高い比率を示していることが、特徴的であった。

(6) 本調査の結果より、学童の耳鼻咽喉科検診は、学童の地域環境により影響されることが判明し、学童保健の上で、極めて意義のあることを強調したい。

擱筆するに当たり、本調査に多大の便宜を与えられた上市厚生病院越山健二院長、ならびにご援助をいただいた町当局に感謝の意を表する。

文　献

1）豊田文一ら：へき地学童の耳鼻咽喉科検診成績（第1報）富山県農村医学研究会誌第2巻 昭和46年

2）豊田文一ら：へき地学童の耳鼻咽喉科検診成績（第2報）富山県農村医学研究会誌第3巻 昭和47年

3）豊田文一ら：へき地学童の耳鼻咽喉科検診成績（第3報）富山県農村医学研究会誌第4巻 昭和48年